

令和 2 年 6 月 8 日現在

機関番号：32682

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K01211

研究課題名(和文) 博物館による特別支援学校と連携したインクルーシブ教育システム構築の実践的研究

研究課題名(英文) Practical Study of Inclusive Education System to be Built in Cooperation Between Museums and Schools for Special Needs Education

研究代表者

駒見 和夫 (KOMAMI, KAZUO)

明治大学・文学部・専任教授

研究者番号：20225577

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：特別支援学校の教員へのアンケート調査から、特別支援学校による博物館学習の低調さと、知的特別支援の児童生徒が博物館利用者として想定されていないとする意識を明らかにし、出前講座と体験型のICT学習ツールの有効なあり方を捉えた。

この結果と博物館の実態調査をもとに、特別支援学校へのアウトリーチプログラムとe-ラーニングコンテンツを作成して8回の博物館出前講座を実践し、その検証から博物館におけるインクルーシブ教育のモデルを構築した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

今日求められる共生社会のなかで、また生涯学習体制の整備の点からも、博物館活動の新たな視点と指針を明らかにすることができた。これは障害のある子どもたちを博物館活動に招き入れるモデルケースとなり、具体的方策を博物館と特別支援学校教育の両者に提供することができる。博物館は、特別支援学校への適切な学習支援を実施することで公教育機関の役割を高め、特別支援学校では、児童生徒の博物館学習への取り組みにより自立と社会参加の推進となる。

研究成果の概要(英文)：A questionnaire survey was conducted on teachers at schools for special needs education to clarify the low level of museum learning by schools for special needs education and their awareness that mentally disabled children are not expected to be museum users. In addition, we captured the effectiveness of outreach and experiential ICT learning tools.

Based on the results and the fact-finding survey of the museums, we created the contents of the outreach programs and e-learning for schools for special needs education. Eight outreach sessions were then conducted to validate the model for inclusive education in museums.

研究分野：博物館教育学

キーワード：博物館インクルーシブ教育 ユニバーサル・ミュージアム 博学連携 博物館出前講座 博物館教育 特別支援教育 ソーシャル・インクルージョン

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

現在、博物館の教育の役割はより重要になりつつあり、それを推進するには地域の各種機関等と連携して、市民のニーズに応じた学習支援活動の実践が求められている。とりわけ児童生徒の学習支援を進めるための博学連携は、博物館運営の主要な活動プログラムとなってきた。この連携は生涯学習体制に位置づく博物館において不可欠な取り組みであり、あらゆる学校を見据えたものでなければならない。

ところが、特別支援学校に対する方法や実践を具体的に考察した研究は少なく、とりわけ知的障害の児童生徒を対象にした検討は遅滞していた。特別支援学校の教員や児童生徒の博物館に対する認識やニーズを博物館側が捉えていないことも、遅滞の大きな要因と考えられた。各博物館でも特別支援学校との連携を図る実践は低調で、特別支援学校の児童生徒に適った博物館学習プログラムの検討や実践の取り組みはきわめて少ない状況であった。

2. 研究の目的

本研究は、博物館と特別支援学校が連携した調査と実践検討をもとに、障害のある子どもたちが障害のない子どもたちと同様に、博物館で共に学ぶことができる仕組みを構築する取り組みである。障害のある児童生徒が精神的身体的な能力等を最大限度まで発達させ、自由な社会への効果的な参加を可能とするねらいのもとで、障害のある子どもたちが障害のない子どもたちと同様に、博物館で共に学ぶことができるインクルーシブ教育の実現を目的とする。

この研究で得られた成果は、各種の障害のある子どもたちの博物館学習の指針と具体的な方策を、博物館と特別支援学校教育の双方に提供することができ、共生社会における博物館の価値を高めるものとなる。

3. 研究の方法

まず、特別支援学校の児童生徒と教員がどのような博物館活動や博物館情報の獲得を望んでいるのか、その把握を目的としたアンケート調査を、千葉県市川市と東京都葛飾区・江戸川区の11学校を対象に実施した。つぎに、アンケート結果から捉えた特別支援学校教育のニーズに対し、学校周辺地域の各博物館での対応の実態について実地と聞き取りの調査、及び関東地方の各博物館についてホームページを検索して対応プログラムを調査した。その分析結果から特別支援学校の博物館出前講座に対する期待と有意性を確認し、とくに知的障害特別支援学校に適った博物館出前講座のプログラムを、和洋女子大学文化資料館と明治大学学芸員養成課程での実践をとおして検討・開発した。これらの取り組みと実践を検証して研究成果をまとめ、博物館と特別支援学校に提示し両者の連携の促進を図る。

4. 研究成果

(1) 特別支援学校教員へのアンケート・聞き取り調査、および博物館への実態調査から

障害のある子どもたちに博物館学習を保障する実践的なプログラムの構築を目的に、各種特別支援学校教員の博物館への認識とニーズを把握するアンケート調査を実施した。千葉県市川市と東京都葛飾区・江戸川区内の特別支援学校教員を対象に、10校408人から回答を得た。

そこで明らかになったのは第1に博物館学習の低調さで、前年度に利用のない教員が7割近くにのぼった。低調さの最大の原因は、授業カリキュラムへの組み入れが難しいことであった。とくに知的特別支援では作業学習が中心であり、調べ学習などは授業に取り込みにくく、カリキュラムに余裕がないため実地学習の場として博物館を設定するのは難しいのである。

また、特別支援学校の場合、利用に際して学習内容だけでなく設備面や安全確保の点など館側との細やかな調整が必要である。この点を博物館が適切に理解してくれないと調整が円滑に進

まない。そのような状況下で博物館学習が可能となった場合は、児童生徒が楽しめることを重視して、活動的で体験のプログラムが整っている館が、遠足や社会見学として選択される。静かな雰囲気のある博物館や美術館は、他者や博物館スタッフへの迷惑の気遣いから利用を避ける傾向があり、背景には利用者として想定されていないとの疎外感も捉えられた。ほかには、移動手段が確保できない、生徒の安全面の不安、展示物などの破損の心配、教育課程上の問題と教員間の認識の違い、も要因となっていた。

なお、障害のある人と博物館のかかわりでは、視覚障害が際立って不利益を被ると認識され、利用や展示理解への工夫がこれまで積極的に取り組まれてきた。その効果があつてか、視覚特別支援の利用率は普通学校と比べて遜色はなく、学習効果と満足度も高い評価であった。これに対して知的特別支援は利用率が低だけでなく、教員の期待度や学習効果も最低の評価となっていた。博物館のユニバーサルサービスの検討で視覚障害は必ず取り上げられるが、知的障害は大きな障壁があるにもかかわらず検討の俎上にあげられることは少ない。

一方、特別支援学校が博物館を利用した場合、児童生徒と教員の満足度は高いものであった。その場合、体験型や触察を中心とした知覚型の展示とプログラムに学習効果のみとめ、満足を得ていることが捉えられた。つまり、体験を組み入れた知覚型の展示やワークショップを準備してアクティブな学習環境を創出することは、特別支援教育で博物館学習を展開するための必須要件であり、インクルーシブな教育の前提条件となる。その際には同一のプログラムを各特別支援学校に展開するのではなく、障害の実態に合わせた工夫が必要とされるのがわかった。

近年では楽しく体験できる展示や知覚にアプローチする展示が増えており、特別支援学校の児童生徒が楽しんで学べる条件が一部でも整っている館は少なくない。ゆえに利用の満足度は高くなるのだが、教員にはそのような博物館の状況の理解が少ないため、学習の場として着目するに至らないのである。聞き取りでは、特別支援学校には博物館の発信する情報が来ないとの意見があった。案内が来たとしても、特別支援学校を見据えた具体的な対応を提示する館はほぼ皆無とのことであった。こうした点も来館対象校と見なされていないとの不満につながっている。

周辺エリアの博物館の実態調査では、特別支援学校への対応プログラムを作って HP など情報掲げる館もある。東京国立博物館では「盲学校のためのスクールプログラム」として、視覚障害に対応したハンズ・オンや作品鑑賞および体験型ワークショップを設けている。また、日本科学未来館では知的障害に向け、展示への興味を引き出して展示体験のサポートを目的としたタブレット端末の「ウェルカム！ナビ」が用意されている。しかし、両館のような例はきわめて少ない。その一方で特別支援学校から相談があれば、博物館の多くは目的に合う対応に努めている。にもかかわらず迎え入れるための情報提供や具体策が十分ではないため、博物館学習の魅力や価値が特別支援学校に伝わっていないのである。体験をともなうアクティブな学びを提供する学習材料やツールを整え、迎え入れる体制を築いて主体的に周知を図ることで、博物館での特別支援教育の学習条件が成立することが判明した。

一方で、他の多様な観覧者の存在や馴れない場所での不安感、また障害の行動特性や症状などの要因により、博物館の実地利用が難しい児童生徒も少なくない。肢体不自由を重複している場合、車いすやストレッチャーから身体を起こして、展示室の壁面ケースの資料や作品をよく見たり、テーブルケースを覗き込んだりするのは困難である。子どもたちの発する声を注意されることがあり、利用をためらうとの不満も聴かれた。障害のある子どもたちが、展示室内で触察を加えながら観覧することは、学習成果や満足度の効果は高い。博物館がコミュニケーションメディアの要素を強化しつつある今日、その場で得られる楽しみと学びは増大しており、博物館での実地学習がその機能と魅力をもっとも享受できる有意義な体験であることは間違いなく、その機

会を確保する対策は必要である。

同時に、来館に困難がともなう実情を鑑みれば、特別支援学校に向けた出前講座などのアウトリーチプログラムの有用性は大きい。出前講座は、特別支援学校へのアウトリーチの方法としてもっとも効果的と捉えられる。特別支援に望まれる個別の対応や、児童生徒のペースに合わせた活動の展開が可能になるからである。内容の点でも資料の知覚観察によるプログラムが組みやすく、児童生徒の実態に合ったスタイルで楽しさと学習効果の充実が期待できる。また、博物館は縁遠い施設と認識している児童生徒と教員に対し、その利用の仕方や楽しみ方、魅力などの情報を発信する場を創出し、ミュージアムリテラシーを育む契機ともなり、それは児童生徒の社会生活の質を高めることにつながって特別支援教育の目的に適うはずである。

(2) 特別支援学校への博物館出前講座の実践を検証して

アンケート調査等の分析をもとに、博物館へのインクルージョンがもっとも遅滞している知的障害特別支援学校への博物館出前講座プログラムと、その教材となる ICT 学習ツールを作成し、5校8回の出前講座を実践した。軽度～中度の知的障害学級、重度重複学級での取り組みである。それぞれ、実物資料を教材にした学びを体験して博物館を楽しいイメージで捉え、自己の活動の場に行えるようにするのを目的とし、生活単元の扱いに位置づけ、土器の知覚観察と、博物館の様子を写真とイラストで知ることを中心に内容を組み立てた。

各回とも終了後に参加教員に評価の調査をおこなった。当該校の生徒がこれからの生活で博物館を利用することの意義の質問では、否定的な回答はなく、すべてが肯定する意見であった。多様な機会を得て経験を積み生活力を培ってほしいという教員の意識が顕著に捉えられた。反面、博物館は魅力的な場所ではあるが、周囲への気兼ねを感じる環境から利用を躊躇するという意見もあった。また、重度重複障害児の担当教員からは、物事の記憶や論理的な理解が困難な子どもであっても経験は大切であり、博物館が利用できるようになってほしいとの回答もあった。ほかに、博物館の実地利用に関する意見では、講座で体験した知覚観察が館内で可能であれば、知的障害の生徒はイメージをしやすいと認識が全教員に共通してあった。

この出前講座の実践と事後調査の分析をもとに、一部の特別支援学校において、受講生徒の博物館実地体験を実施した。見学に際し、博物館側と相談して教員の気兼ねを緩和すべく条件を整え、また生徒の不安を和らげるために出前講座のスタッフが展示案内を務めた。事前に、学校では出前講座の振り返りをして土器と博物館の記憶を呼び起こし、「博物館で土器をみよう」という意識を生徒がもつように対応された。そのため生徒のモチベーションは高く、案内スタッフや教員によく話しかけながら博物館を体験していた。展示空間の雰囲気を感じられるように全体を案内し、生徒の集中力を勘案して資料観察は土器に絞った。短時間であったため触察資料は準備しなかったが、土器の展示を前にした生徒の多くに興奮の様子がみられ、観覧のスタイルや感覚はそれぞれで、案内スタッフや教員への問いかけ、友人との会話、感情表現も盛んであった。大きい声を発したり床に座り込んだりする生徒もいたが、教員が細かくサポートし、他の観覧者には案内スタッフが声をかけて理解を求めたことで、好意的に受け止められていた。

観覧後、教員に評価の聞き取りをした。生徒たちは慣れない空間であったが、相互に世話をしながらリラックスして博物館体験ができたとの意見が多く、生徒と一緒に教員も楽しめたとの感想もあった。学校と博物館の相互が安心できる環境作りに努めた成果である。また、生徒たちが同行者と会話をしながら観覧できたことを、どの教員も評価していた。各自が感じた気持ちや驚きなどを言葉や態度で気軽に分かち合えたことが、それぞれの満足度を高めたようである。博物館の実地体験は、生徒たちの土器の知識をさほど深めるはしなかった。しかし、歴史系の博物館利用がほとんどない生徒も多く、実地体験を通して発見や納得の様子が捉えられ、文化的・社

会的な興味を広めることができたと感じられた。教員の評価も裏付けになっている。社会を知り、生きる価値を感受する学びは、他者とのかかわりで生まれる部分が多い。知的障害の子どもたちの博物館体験を実現することは、博物館が社会教育の役割と向き合うことだと捉えられた。

生涯学習の拠点に位置づく現代の博物館では、市民への学習支援の基盤になるのは展示であり、それが博物館教育の根幹をなしている。ただし、展示が機能を発揮するには博物館への来館が前提となる。加えて、親しみをもって楽しんで参加してもらうことにより、はじめて意味を持ち価値が生まれてくる。この点において、博物館利用の意欲づけとリテラシー育成の糸口を意図した出前講座は、実践検討を通して有意な博物館活動であることを明らかにできた。

このような目的を明確にした出前講座は、博物館の学びの楽しさと価値に疎い子どもたちの博物館利用を押し上げ、物理的・心理的なバリアを博物館にもつ子どもたちにも利用の扉を開くことができる。また、博物館学習への参加を積極的に求めなかった、あるいは、参加を阻まれた児童生徒への学習機会の保障となり、生涯学習社会における学習の継続性にも結びつく。これがアウトリーチのもっとも大切な価値であり、ゆえに社会教育の役割を遂行するための博物館の枢要な活動とみなすべきであり、これを実現するための基盤は、すべての人たちの学びと楽しみに適うよう、博物館は環境とプログラムを整えることである。多様な人たちが集まるとともに築かれるものが、共生社会における博物館の文化だからである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 駒見和夫	4. 巻 20・21合併号
2. 論文標題 博物館におけるインクルーシブ教育 特別支援教育との連携の観点から	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 全博協研究紀要	6. 最初と最後の頁 81,103
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 駒見和夫	4. 巻 第118巻11号
2. 論文標題 博物館の理念的認識の推移について	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 國學院雑誌	6. 最初と最後の頁 263,282
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 駒見和夫	4. 巻 46号
2. 論文標題 特別支援学校の子どもたちを博物館の学びにつなぐ	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 MUSEUMちば	6. 最初と最後の頁 9,16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 2件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 駒見和夫
2. 発表標題 特別支援の子どもたちを博物館の学びにつなぐ
3. 学会等名 千葉県博物館協会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 駒見和夫
2. 発表標題 特別支援学校との連携による博物館のインクルーシブ教育の検討
3. 学会等名 全日本博物館学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 駒見和夫
2. 発表標題 土器と人を結ぶ知覚アプローチの可能性
3. 学会等名 シンポジウム「モノと人を結ぶ - 展示資料とのコミュニケーション - 」(招待講演)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

博物館出前講座 komami1.sinsei-kk.co.jp はくぶつかんのようすをしらべてみよう komami2.sinsei-kk.co.jp

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	新井 祥子 (Arai Syouko)		

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 協力 者	村上 涼子 (Murakami Ryouko)		